

元歴戦ハンターが早めのスローライフを送っていたらモンスター娘達と出会いました。

棚田 水母

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪我が理由で若くして現役を引退した歴戦ハンターである主人公は、今まで貯めた金を使い、導きの地の奥地に自宅を建築し、そこで自由気ままなスローライフを始める。

そんな主人公の元に、ある日突然モンスター娘達が現れて主人公に子種を求めるようになり………？

『子種をください………♡』

「………どうしてこうなった（血涙）」

（※この小説は作者の深夜テンションが原因で生み出されたものです。過度の期待はせず、IQを低下させてから御一読下さい）

目次

飛雷竜ちゃんとお風呂	1
飛毒竜ちゃんのお料理	9
風漂竜ちゃんとおの日の悪夢	16

飛雷竜ちゃんとお風呂

「——ふう」

無事に狙った獲物に突き刺さった矢を見て、白い息を漏らす。まだハンターを引退して一年。そのはずなのに、まるで何十年も経っている様に感じてしまう。これが老いか……

「と、さっさと剥ぎ取るか」

身を潜めていた草むらから出て、腰に刺した解体用の短剣を抜く。今回仕留めた獲物はポポ。成体になると体が巨大になり、その分剥ぎ取れる部位が多くなるので狩り暮らしの俺には有難い獲物だ。

「——美味しくいただきます」

倒れたポポの前で静かに祈り、短剣を突き刺す。多くのモンスター達は俺達に災いを齎す。当然、そこで彼らに対する憎悪も発生するだろうが、決して否定してはいけない。

俺達人間は、モンスター達のお陰で生きてるのだから。だから、祈りを忘れてはいけない。モンスター達の命に対する感謝を忘れれば、人はその時点でモンスター以下の獣になる。これは、俺が師匠から学び、俺に教えを乞うた者達に最も最初に教えた事でもある。それほどまでに重要な事だ。

「よ……と。皮を剥ぎ取って鞆に入れて……肉は、小分けにして入れられる分だけ入れるか。後は自然の恵みに返そう」

自分に必要な分の肉だけ取って、あとはそのまま放置。こうすれば、このポポは自然の栄養となり、自然に還る。これも師匠に教わった事だ。

「よし、帰るか」

重くなった鞆を抱えながら、雪が積もった土地を歩く。ぎくぎくと小気味良い音が響き、一面の銀世界に俺の足跡が刻まれていく。

「にしても、相変わらず不思議な場所だな」

暫く歩くと、強い風が吹き付ける高台へと出る。そこから見える景色は圧巻の一言で、木々が生い茂り、砂漠が広がり、珊瑚が彩り、灼熱が這う、俺が現役時代に見てきた様々な土地の環境を合わせた、

パッチワークの様な島。それが、俺の住まう導きの地という場所だ。未だにこの土地には謎が多く、様々なモンスターが生息するため研究もなかなか進んでいないらしい。更に独特の生態系であるが故に、熟練のハンター達も嫌厭する曰く付きの土地だ。

「俺からしてみれば、理想郷なんだけどなあ」

人が少なく、それでいて生活可能なある程度の要素が揃っている。更にはこの特殊な生態系故か、ここのモンスター達は、他の土地のものとは違って上下関係が強く刷り込まれており、一度力関係を理解すれば余程の事が無い限り此方にちよつかいを掛けてくることは無い、とても素晴らしい土地だ。

——ある一点を除けばだが。

「よつこらせ、と。ふう、漸く着いたな。此処に我が家を建てた時はどうなるかと思つたが、いい運動になるし、丁度いいか」

導きの地、森林エリアの最奥。植物による天然の迷宮を抜けた先にある建造物こそ、俺が材料や設計、建築の全てに拘つたマイハウスである。流石は俺が拘り抜いたマイハウスだ。見る度に溜息が出るほど、素晴らしい出来だ。きつと、今の俺の顔を見る者が居れば、気持ち悪さのあまりに悲鳴を上げてしまうだろう。それほどまでに俺の表情は緩んでいる。その自覚がある。緩んだ表情を正し、自宅の扉に手をかけようとした。

「——はあ。またか」

さつきとは別の意味の溜息が溢れる。これで一体何度目だ。確かにこの土地は素晴らしい場所だ。だが、この地はその素晴らしいさを打ち消してしまう程の、厄介なことが存在する。

「一体、今回は誰が来てるんだか……」

二度目の深い溜息を吐き、覚悟を決めて扉を開ける。

「おかえりなさい〜！ご飯にする？お風呂にする？それ・と・も……♡」

「どれも却下だ、この不法侵入者」

妖しい息を吐きながら、その瞳にハートマークを浮かべる美少女に向けて、解体用の短剣を振る。だが、そいつはふわりと身軽な動きで

それを躲した。

「もお。相変わらず辛辣だなあ。あ、ツンデレってやつ?」

「断じて違う」

俺の目の前に居るのは、肩口で跳ねる水色の髪に赤眼の美少女。服装はショートパンツにタンクトップといった、少々露出多めのもの。母性の象徴である双丘は慎まし過ぎず、大き過ぎない、丁度良い大きさをしている。その澁刺した笑みは、あらゆる雄を墮とす魔性の笑みだろう。俺も、何も知らなければすぐさまその笑顔に墮ちていた。そう、何も知らなければ。

「ったく、何の用だ?トビカガチ」

そう、こいつの正体はモンスター。あの、多くの駆け出しハンター達をその軽快な動きで翻弄し、苦しめた、飛雷竜トビカガチなのだ。そんなことを言われても信じられないだろう。だが、実際にそうなのだ。こればかりは、信じてくれとしか申し開きようがない。

「ええ〜?何ってそりゃあ……。旦那様の子種を貰いにね♡」

「まじで帰れ、この色情魔」

「あ、これってポポの肉だね!お姉が偶にお土産で持ってきてくれるんだけど、美味しいから大好物なんだ!……もしかして、僕への愛のプレゼント?」

「あ、おい!人の飯に手を出すんじゃない!!」

するりと素早い動きで俺の懐まで侵入したトビカガチは、腰の鞆に鼻を近づけ、香りを嗅いでいた。姿形は人のそれなのに、身体機能はモンスターの時のままなのかと思うと違和感が凄い。

「わかっよお。だから、そんなに怒らないで?あ、そうだ。もう帰ってくると思って、お風呂の準備しておいたんだあ。今日は雪原地帯まで狩りに行ったんでしょ?だったら、早めに体を暖めないと、風邪ひくよ?」

そう言っ、トビカガチはポポの肉を持って地下の食料保管庫へと降りていく。っていうか、風呂の準備って……最早、我が家の様な振る舞いっぷりだな。

「とりあえず、風呂入るか」

何度目か分からない溜息を吐きながら、俺は風呂に向かった。

「——はあ〜」

吐き出した息と共に、疲労が抜けてゆく感覚がする。やはり風呂は良い。汚れだけじゃなくて疲れもとれる。全く、こんな素晴らしいものを発明したのはどこのどいつだ。褒め称えてやりたい。

「……………にしても」

ふと先程の玄関先でのやり取りが思い出す。

最近になって我が家に襲来するようになったモンスター娘達。正直に言うと、その存在は謎だらけだ。そもそも、数ヶ月前まで彼女達は歴戦モンスターだったらしい。だが、どういう訳か俺と戦った後、その姿が人のそれへと変わったらしい。何故、彼女達は人の姿になったのか。俺の与えた傷が原因なのか。ハンター歴がそこそこな俺にも、皆目検討がつかない。

「……………っていうか、なんであいつら俺に執着するんだろうなあ。一度殺されかけた相手ともなれば、恨みこそすれど好意を抱くようにはならないはずだ。」

「そんなの、お兄さんに惚れたからに決まってるじゃん。自分より強い雄を求めるの当たり前でしょ?」

「いや、そもそも何で殺されかけた相手を好きになるのかが理解できなあ。あ。あ。あああああああああ!?!」

「?どうしたの、お兄さん」

「おまツ!?なんで入ってきてんの!?てか、服は!?!」

「?お風呂に入るのに服は着ないよ?」

「そうだけどね?!いや、入るタイミングおかしいだろ?!」

不味い。今の状況は不味い。目に毒なんて言葉では済まされない程の光景が俺の前に広がっていた。いつの間にか湯船の前に生まれのままの姿で立っていたカガチ。網膜に刻まれたその姿が、俺の雄としての本能を掻き立てる。気付けば、俺はカガチから目を逸らしていた。

「むう。なんで目を逸らすの?」

「あ、当たり前だろ!目の前で女が素っ裸になってたら誰だつてこうするつての!てか、ホントに何しに来たんだよ!」

「え?だから、お風呂に入りに来たって言ってるでしょ?僕も入りたかったからさあ。ね、一緒に入ろうよお。ついでに僕の体でイイコトしょ?」

「誰がするか!!」

「むう。頑だなあ」

「とにかく!俺はもう上がるからな!」

これ以上この空間に居たら理性がもたない。早々に風呂から抜け出そうと俺はそのまま浴槽から立ち上がる。そこで、俺はカガチを押し倒す様にして倒れた。

「あ、れ」

足に力が入らない。文字通り足が棒になったようだ。状況が理解できない。ただただ困惑していると、俺の下からくすくすと笑う声が聞こえた。

「くすくす」

「カ、ガチ。お前、なにを」

「え?まだ分からないのかなあ」

揶揄う様に笑うカガチ。するとパチャパチャと湯船から何かが跳ねる音が聞こえた。何とか動く首を回して、湯船を見る。

「尻尾」

見覚えのある青い尻尾。それは紛うことなき飛雷竜トビカガチの尻尾だった。

「最近、人の姿のままでも一部分だけならモンスター^の姿になれるようになったんだあ。それで、尻尾をこつそり湯船に浸けて弱い電気を流し続けて、下半身だけ麻痺させたんだあ。なかなか器用でしょ？」
再び笑うカガチ。つていうか、この体勢ヤバっ……！！

「ねえ、別に我慢しなくていいんだよ……？ただ本能の求めるままに犯して、破つて、貫いて、好きなようにして……？」「
囁くように女が呟く。甘い声が俺の脳を犯す。美しい肢体が俺の息を乱す。柔らかな双丘が俺の瞳を奪う。理性が蕩け、ぐずぐずに崩れそうになる。それでも、寸での所で何とか持ち堪えていた。

「——貴方の子種を僕に頂戴♡」

甘い誘惑と共に、ぺろりと女の舌が俺の耳を掠めた。

ふと何か切れる音がした。それが理性の糸が切れる音なのだと、何となく実感しながら。俺は誘蛾灯に誘われる虫のように、ゆっくりと女へと手を伸ばす。

「ふふっ。そうだよ、こつちにおいで……♡」

ゆらりゆらりと手が伸びる。もう少しで彼女の母性の象徴に手が届く。

『——つたら——しよう——』

「——あ——」

ふと昔の記憶^{約束}が過ぎった。

「——え？——」

それを思い出した途端、反射的に俺の手は拳を握り、己の頬を殴っていた。寸前でカガチの惚けたような声が聞こえたが、生憎と気にかけている暇は無かった。

「——!?!——!!——」

カガチの慌てた様な声が聞こえるが、既に俺の意識は沈み始めている。思いの外、いい一撃が入ったらしい。ゆっくりと俺の意識は消えていき、そして数秒後には俺の意識は完全に暗転した。

「はあ．．．．．全く、無茶するなあ」

僕は溜息を吐きながら、目の前のベッドで眠る人を見つめていた。

——お兄さん。誰よりも強い人間でいて、僕が惚れてしまった人間。

他の人間とは違う、僕達を負かす程の実力者。そんなお兄さんが愛しくて、狂おしくて。ついつい、僕の子宮が疼いてしまう。

「．．．．．襲っちゃおうかなあ」

ベッドで寝ているお兄さんは裸のままだ。ちらりと布団から鍛え抜かれた胸板が見える。

．．．．．やっばい。生唾を飲むなんて初めての経験だよ。僕はゆっくりと布団に手をかける。息が荒くなる。さっきのお兄さんもこんな気持ちだったのかなと思いつつながら布団を剥いで行く。胸板、腹筋とゆっくりとお兄さんの体が見えてくる。あと少しで、お兄さんの全てが僕の目へと映る。

「——」
ふと先程のお風呂でのやり取りを思い出して、手が止まった。お兄さんが倒れる直前、その時に見たお兄さんのあの顔。まるで迷子になった子供のような表情。あれは、初めてお兄さんと会った時と同じ顔だ。

「．．．．．はあ」

あの顔を思い出すと、無理に迫る気なんてなくなってしまう。すっかり萎えてしまった僕はお兄さんに布団をもう一度掛けて、お兄さんの横に寝転ぶ。所謂添い寝の状態だ。

お兄さんの顔が間近にある。安らかな寝息が、僕の眠気まで誘ってくる。

「．．．．．ねえ。お兄さん、貴方は一体誰を探してるの?」

返答はない。尚も聞こえるのは寝息のみ。

うつらうつらと僕の意識も途切れ始める。

「——いつか、僕がお兄さんの探す誰かの代わりになれればいいなあ」
この願いは叶わないのだろう。
それでも、口にせずにはいられない。
だって、僕も女の子なんだから。

——好きな人と結ばれたいと思うのは当然でしょ？

「……………ふふっ。おやすみい、お兄さん」

きつと明日の朝にはまたこの状況を知って、お兄さんは大慌てする
んだろうなあ。

ふふっ、明日も楽しみだなあ。

飛毒竜ちゃんのお料理

カガチと風呂場での件が起こってから数週間。あれから特に何も起こらず、最近の俺は穏やかに過ごしていた。

「朝の鍛錬をするのも久々だな」

平穏な日々を過ごしていた俺は、久しぶりに自宅から少し離れた場所にある森で鍛錬に勤しんでいた。無数の丸太が振子の様な動きをしながら襲いかかる中、それを躲し、あるいは太刀で弾く。最近は起きたら必ずモンスター娘達が居たから出来ていなかったが、こういった鍛錬は俺の日課だ。自慢では無いが、俺は現役の時、ウェポンマスターなんて言う通り名で呼ばれていた。その通り名の通り、俺はあらゆる武器を使い熟す事ができる為、その分日頃の訓練が多く、内容も多彩だ。今回やっているのは太刀の訓練。迫り来る丸太を躲し、時に迎撃するといった訓練だ。日頃から訓練をするという行為を面倒に感じる人も多い。だが、俺はこれらが必須だと思っている。ハンターの一番の敵はモンスターではなく、慣れた。調査団の資料を見れば分かるが、ハンターの死亡率は駆け出しより熟練のハンター達の方が高い。これは俺の考察だが、原因は先程も言った慣れたと思う。駆け出しの頃は慣れない狩りで必要以上の準備や警戒を行うハンターが多い。だが、狩りに慣れていくとそれらを忘れて行ってしまう。準備を怠り、警戒を忘れ、慢心を抱く。それが原因で命を落としてしまうのだ。だからこそ、日頃からの訓練を怠ってはいけない。様々な訓練をし、慣れ過ぎず、常に初心を忘れない。全ては自分の命を守る為だ。

「つと、今日はここまでだな」

丸太を相手にすること一時間。

流石にこれ以上はオーバーワークだ。

俺は汗を拭いながら帰宅の用意をする。

自宅から離れていると言っても徒歩十分程だ。元ハンターである俺からしてみれば、大した距離じゃない。あつという間に家に着き、玄関の扉を開ける。

「.....ん？」

家に入ると、生き物の気配と空腹を刺激する匂いがした。その気配は、俺の気配に気づいたのか、とたとたと控えめな足音を鳴らしながら玄関に向かつてくる。・・・なんだが、デジャブを感じるな。「おかえりなさい、ハンターさん」

「・・・次はお前か」

赤茶色のロングヘア、美しい橙の瞳に光を宿す美少女。飛毒竜トビカガチ亜種、通称毒カガチが、俺を迎えた。

「勝手にお邪魔してすみません。先日、妹がご迷惑をかけたようでしたので、お詫びをと・・・」

「そりやどうも」

毒カガチの妹というのは、カガチの事だ。二人は姉妹関係にあるらしい。しかし見た目こそ似ているが、性格は全くの真逆だ。カガチは奔放な性格だが、毒カガチは真面目で几帳面、加えてモンスター娘達の中でも五本の指に入る常識人でもある。・・・まあ、その常識人でも、俺の家への不法侵入は当たり前前になっているらしいが。

「・・・っていうか、その格好どうした？」

「お料理をしたので、エプロンを着てたんです」

似合いますか、と言いながらくると回る毒カガチ。ふわりと彼女の瞳と同じ橙色のエプロンが舞う。その姿は、嘘でも似合っていないとは言えそうにない程に美しい姿だった。

「・・・おう、よく似合ってる」

「ふふっ。ありがとうございます♡」

・・・くそツ。こいつはこれだからやりづらい。カガチの様にグイグイ来るタイプならただ単純に拒絶すればいいだけだが、毒カガチはあまりそういう事はしない。寧ろ、一歩引いた所から見守り、俺に尽くしてくれるタイプだ。こういうタイプは明確に拒絶しづらいので、俺はカガチとは違う意味でこいつが苦手だ。

「もうすぐ料理が出来るので、軽く汗でも流してきてください」

そう言っつて、毒カガチはリビングへと消えていく。

「・・・汗を流せつて言っただけど、あいつは妹みたいに乱入してきたりしないよな？」

少し、警戒しながら風呂に入った。
お陰で少しも休まらなかった。

「……………すげえ」

思わず感嘆の声漏れた。目の前には見ただけで空腹になりそうな料理達が所狭しと並べられている。人生で固唾を呑むという言葉を実際に体験するとは思わなかった。

「ふふつ。そう言われると作った甲斐があります。さあ、どうぞ座ってください」

不法侵入者に着席を促されるとはこれ如何に。……………まあ、流石の俺にも食欲には勝てん。大人しく席に座る。毒カガチと向かい合う様な形だ。毒カガチはニコニコと微笑みながらこちらを見つめている。……………どうやら、俺が食べ始めるのを待ってるらしい。

「……………いただきます」

「召し上がれ♡」

恐る恐る料理に手をつける。最初は魚の煮付けのようなもの。身をほぐし、口に入れる。

「……………美味い」

思わず声に出してしまう程、それは絶品だった。とても俺好みの味で、とても病みつきになる。気づけば、次々と料理を口に運んでいた。

「……………よかったあ♡」

「ん？なんか言ったか？」

「いえいえ、何もありません。さ、いっぱい食べてくださいね」

言われずともそうするつもりだ。俺の手は止まることなく、料理を口に運び続ける。数十分後には全ての料理を平らげていた。

「ごちそうさま。美味かったよ、何か病みつきになる味だった。何か特別な材料でも使ってるのか？」

「お粗末さまです。別に特別なものは使ってないですよ、強いて言うなら隠し味に愛情をたっぷりですかね♡」

ウインクをしながらぺろりと舌を出す毒カガチ。なんとも可愛らしい仕草に思わずどきりとする。俺が暫く固まっていると、毒カガチはクスクスと笑いながら片付けを始めた。その動きには一切、無駄がない。家事をし慣れてるように見える。・・・モンスターって、家事とかすんのか？

「・・・結婚したら、こんな感じなのかあ」

ふとそんな呟きが漏れた。すると、毒カガチが勢いよく此方を振り向く。卵を剥いた様な白い肌が赤く染まっている。

「そ、そんな・・・急に結婚だなんて・・・でも、そんな強引なハンターさんもしゆきい♡」

「いや、落ち着け」

ふにやふにやと毒カガチの頬が緩む。いや、最早あれは溶けると形容した方がいいのか。兎に角、先程の凜々しい顔つきから一変、なんとも可愛らしい表情だ。並の男ならこのギャップにやられている所だった。

「結婚・・・けっこん・・・ケツコン・・・えへへ・・・」

あ、嫁入り道具を持って来ないと！」

「おーい、帰ってこい」

「ちよつと、家に帰って準備してきますッ！」

「落ち着け」

「あう」

このままだと暴走が止まらなそうだったので、毒カガチの額を軽く小突く。毒カガチは額を抑えながら、涙目になり上目遣いで此方を見つめている。その仕草がなんとも可愛らしい。

「何回も言うけど、落ち着け」

「ううっ・・・すみません・・・」

肩を落とす毒カガチを尻目に、俺は再びソファへと腰をかける。ゆっくりと息を吐くと、段々と瞼が閉じそうになってくる。満腹になったのと久しぶりの訓練の疲れが睡魔へと変化し、俺の瞳を閉ざそ

うとしてくる。

「わるい……毒力ガチ……寝る……」

俺は毒力ガチの後ろ姿を見ながら、意識を手放した。

「……ハンターさん？」

一通りお皿を洗い終えた私はハンターさんの方に振り返る。私の視線の先にいたハンターさんは可愛らしい寝息をたてながら眠っていた。

「……ハンターさん、寝ちゃいました？」

何度かハンターさんの頬を突く。返ってくるのは寝息だけだった。

「ふふっ、ふふふふふふっ♡」

彼の頬に自分の手を添える。それだけで、とてつもない多幸福感が私の中に湧き出てくる。

彼を自分だけが独占しているという興奮が私の息を荒くする。

「ふふっ、言いましたよねハンターさん。料理の隠し味は愛情だって♡」

まるで子供の様に美味しい美味しいと食べてくれたお手製料理。隠し味にハンターさんへの愛情をたっぷり込めた特製の毒を数滴入れておいた。睡眠と僅かな中毒症状を促す特別製だ。

「ふふっ、少しずつ貴方の中に私を刻み込んであげます♡……ゆっくり、じっくりと、毒から離れなくさせてあげます♡♡」

そうやって、彼の全てを私のものにする。

子供の様に可愛らしい彼も、いつもの逞しくて凛々しい彼も、怒っている彼も、悲しんでいる彼も、全部私のもの……♡

「そういうえば、あの子にはお礼を言わないといけませんね」

私の妹。可愛らしくて、少しお馬鹿で、私にここを訪れる理由を作ってくれる、都合のいい妹。

「こんな風になったのも、全部ハンターさんのせいですからね？」

今までは、妹と穏やかに過ごさせてさえいればそれで良かったのに。こんなにも焦がれて、狂ってしまった。貴方さえいれば妹も、世界も、もう何も要らない。

ハンターさんの横に腰かけ、凭れ掛かる。

この間、妹は添い寝をしたと言っていたから、私の匂いで上書きしないと……♡

体を密着させて、彼の頬にそっとキスをする。

「ツ!？」

ほんの一瞬触れただけでとてつもない快感が私の体を走る。背徳感と多幸福感が電流となって私の体を駆け抜ける。今まで感じた事の無い快感に私の腰は砕け、足が震える。立ったままなら多分床にへたりこんでいた。

「も、もういつかい♡」

ふらふらと誘蛾灯に群がる虫のように、さっきの快感を求めてもう一度キスをする。

もう一度、もう一度、もう一度。

そう何度も重ねていって、頬や首、鎖骨、少し服をはだけさせて、胸板などにもキスを落とす。回数を重ねる程に、私の体と心がハンターさんへと堕ちていく。

「はぁ♡はぁ♡あは、はんたーさんのせいで、こおんなわるいこになっちゃいましたぁ♡♡」

呂律の回らない舌を何とか動かしながら、そんな言葉を漏らす。酸素不足か、興奮し過ぎたのか、視界が明滅し始める。これ以上は意識が不味いと直感的に理解した。

「はぁ、はぁ、さいごぉ、これで、さいごですからぁ♡♡」

唾液で濡れた唇を、ハンターさんの唇に近づけていく。

——ちう……♡

「あ……♡」

今までのものとは比べものにならない快樂。

明滅が激しくなり、次第に意識が遠のいていく。先程までの凭れ掛

かる体勢から、ハンターさんの方へ倒れてしまう。密着する面積が増えて、ハンターさんの温もりと私の熱が交わっていく。ハンターさんという毒が、私の体を侵食していく。そんな錯覚を覚えて、意識が遠のいていくのに、これ以上ない興奮と幸福を感じてしまう。

「あ、は♡こんな風にしたんですから、責任、取ってもらいますからね♡♡♡」

愛しい愛しいハンターさんの手を握り、私の意識は消えていく。

——いつか、私がハンターさんに溺れた様に、貴方のことも墮としてあげますからね♡♡

風漂竜ちゃんとあの日の悪夢

「ごほっ、ごほ」

喉の違和感を誤魔化す様に吹き出した咳が静かに部屋の中を反響する。鈍く響く頭痛が意識を苛み、悪寒が体を震わせる。全身の節々が軋む様に痛み、軽い吐き気すら感じる。

そう、俺は珍しく風邪を引いてしまった。

俺は元ハンターだ。体が資本の職業故に、人並み以上に丈夫な体を持っていてるつもりだ。

それ故に風邪を引く事は滅多に無く、引いたら引いたで、今まで引かなかった分が襲いかかる様に重症化する。自分の体ながら厄介な体質だと思う。

「ごほっ、確か………薬が、キッチンに」

布団から何とか這い出て一階のキッチンに向かおうとするが、体が上手く動かない。

全身に重りを身につけ、更に水中に沈めた様な感覚だ。

「あ、やべェ」

床を踏みしめる筈の足が纏れ、そのまま前方に倒れそうになる。

「何してるんですか」

「ふい」

倒れた体は前方にあった何かに支えられる。

その時に柔らかな感触が顔を包む。

とても甘く、蕩けそうな、それでいて何処か安心出来る匂いが、鼻腔を駆け抜ける。

その心地よい匂いに包まれて、疲れきっていた体に張り詰められていた糸がぷつんと切れてしまう音がした。

「ちよつと、本当に大丈夫ですか!？」

何処かから聞き覚えのある声が聞こえる気がする。だが、その声は主の正体を理解する事は消えていく意識では不可能だった。

「先生、今大丈夫ですか？」

背中に太刀を背負った青年が暖簾を潜る。

広がった視線の先には銀色の髪を肩口で踊らせる美しい女性が居た。

「おや、どうかしたか？我が弟子よ」

「いえ、その、今度の地下空洞の搜索ですけど、大丈夫ですよね？」

青年は少し言葉を迷いながらも紡ぐ。

すると女は吹き出す様に笑い始める。

女は一頻り笑い終えた後、涙を拭いながら空いた手で自身の隣を叩き、青年に横に座るよう示す。

「全く、君は心配性だね。そんなに不安にならずとも、大丈夫だよ。私の実力は君が一番よく知っているだろう？」

「………勿論です」

女は様々な功績を挙げた歴戦のハンターだ。新大陸の異変の阻止、数々の古龍種の討伐、果てには導きの地と呼ばれる未確認の孤島さえ発見した。そんな女の功績を称え、人々は彼女を導きの青い星と呼んだ。

「それに、今回は君もいる。……それはそうと、君の口調。また敬語になってるよ。二人っきりの時は敬語は無しって決めたただろう？」

「はい………じゃ、ないか。ごめん」

女は隣座った青年の肩に頭を預ける様にして凭れ掛る。青年の気恥しそうな顔を見ながら、女は満足そうに微笑む。

「私の心配をしてくれるのは嬉しいが、君は自分の心配をした方が良い………私も、未亡人にはなりたくないからね」

「………勿論」

気づけば自然と互いの手が重なり合い、互いの感情を示すかの様に絡み合う。

同じ様に互いの視線が絡み、その瞳には僅かに熱が孕んでいる。その熱に浮かされて、二人はそつと唇を合わせる。ただ重ねるだけの優しい口付け。

それだけで、二人の心は満たされる。

女は嬉しそうに顔を綻ばせ、青年は頬を赤く染めながら視線を逸らす。

「ふふっ。狩りの時はあんなに勇ましいのに、こういう所は初心なんだな」

「仕方ないだろ……好きな人と一緒なんだから」

ぽそりと呟かれた言葉に、女の動きが止まる。視線を逸らしていた青年は、妙な空気を感じ取り、女の方を見る。

女は、顔を赤らめて口を半開きにしていた。

普段見ない女の表情に、青年は思わず見惚れてしまう。

「……ああ、全く。君は不意打ちばかりだな」

そう言つて視線を逸らす彼女の姿は、何とも愛おしい。つつい青年の頬も緩んでしまう。

「相棒、先輩！もうすぐ出発ですよ！」

そんなやり取りをしていると、入口からそばかすが特徴的な女の子が入ってくる。

「どうやら、蜜月の時間もここで終わりの様だ。」

「ああ、分かったよ。……さて、行こうか、旦那様？」

そう行つて手を差し伸べる女の手を青年は迷うこと無く掴む。

この時、青年はこの日常が続くと思つていた。然し、世界に絶対はないのだ。

希望に溢れる未来も、華々しい夢も、焦がれる程の願いも、驚く程簡単に瓦解する。

「——生きろ、○○。私の分まで、幸せになれ」

黒き龍と滅びの炎に立ち向かう女は、青年にそう言つた。彼を突き放す様に、彼を守る様に、女はそこを死地とした。

離れたくない、離れたくない、離してなるものか。

——今度こそは、彼女を守るんだ

遠くなる記憶的一幕に、男は手を伸ばす。

然し、手にしようとして掻く程、視界にノイズが迸り、意識は遠く沈んでいく。

「世界の誰よりも、君の事を愛してる」

意識が途切れる間際、愛しい人の言葉が聞こえた。

ゆっくりと意識が浮上する。朧気だった意識が、額の冷たさによって覚醒を促される。

未だに重い腕を上げ、額に乗ったそれを見つめる。氷嚢だ。然し、自分で置いた覚えはない。誰が、いつの間に、そんな事を考える前に、つい先程まで見ていた夢の記憶が鮮明に浮かび上がった。

「先生……」

懐かしい夢だ。俺の後悔、俺が此処に来る理由となった出来事。

そうだ、あの人は俺を守る為に死んだ。

俺のせいで、先生が死んだんだ。

「ごめん……ごめん」

あの日と出来事が、まるで薪を足した焚き火の様に、再び俺の心で燃え上がる。

あの日の後悔とあの龍への憎悪が、全身を支配する。

あの日、黒龍より受けた左腕の傷が疼く。

然し、その苦しみの吐き口となるものは、もう居ない。

先生は俺を庇って死に、件の黒龍は俺の手によって討伐されているのだから。

だから、だからこそ、この怒りが、憎悪が、己への不甲斐なきが、血液の様に俺の体を巡っていく。

「それは何に対する謝罪でしょうか」

それらの感情の巡りは、少女の声によって止まる。

声の方向を見ると、そこには美しい青色の髪を腰ほどまでに伸ばした美少女が、お盆を持ちながら立っていた。

「お前……レイギエナか」

「はい。〴〵無沙汰しています、ハンターさん」

風漂竜レイギエナ。新大陸に存在する陸珊瑚の台地の主として君臨する飛竜種モンスター。ハンターとして遭遇すれば、厄介この上ない存在だが、人型である彼女にその面影は見られない。

美しい青い髪に、花卉の模様をあしらったワンピース。その姿は何処か高貴さと優雅さを感じさせる美しい少女だ。

「お前、なんで……」

「なんで、とは心外です。ハンターさんが熱で倒れてしまったので、甲斐甲斐しく看病してあげてたんですよ」

どうやって家に入ったか、という意味だったんだが……まあ、この手の質問はするだけ無駄だと分かっている。同じ質問を別の者にしてみると、一人は愛の力と宣い、もう一人はただ威^{微笑}圧^むするだけだった。

レイギエナは此方にやってくると、手に持ったお盆をベッドの脇にあるテーブルに乗せた。ふわりと腹を刺激する美味そうな匂い。

お盆の上に目を向けると卵粥が器に入れられていた。

「これは……」

「どうやら、朝から何も食べてなさそうでしたので。失礼とは思ったのですがキッチンを拝借して作ってみました。食べれるなら是非」

そう言つて差し出される卵粥。

……正直、腹の虫は限界だ。匂いを感じとつた瞬間から絶え間なくその声を震わせている。俺は素直にレイギエナからスプーンを受け取り、粥に手をつける。

「……うめえ」

「それは良かったです」

するすると不思議なぐらいにスプーンが進む。空っぽだった胃袋に暖かな卵粥が流れ込み、ポカポカと体が温まってくる。

俺はあつという間に器一杯分の粥を平らげてしまった。

「ご馳走様でした」

「はい、お粗末さまでした」

レイギエナは俺の食べ終えた食器を再びベッド脇のテーブルまで下げてくれる。

てつきり、一階のキッチンまで持って行ってくれられるのかと思っただが、レイギエナは俺の顔をじつと見続けている。

「な、なんだよ」

「ハンターさん。私は今日、貴方の事をそれはそれは手厚く看病しました」

突然何を言い出すんだこいつは。

いや、確かにその通りではあるが、改めて言い出す必要がどこにある？

「人は労働の対価として何らかの報酬を求めるそうですね」

「まあ、確かにそうだが」

「ならば、私も報酬を要求します」

未だ病に侵されて衰弱している人間になんて事を言うんだこいつは。

確かにレイギエナの言い分は正当なものだ。

倒れた所を看病してもらったのだから、お礼をするのは当然のことだろう。

然し、タイミングというものを考えられなかったのか。

「ご安心ください。報酬と言っても簡単なことです。それこそ、未だに衰弱しているハンターさんにもできる事です」

「まあ、それならいいが……」

俺が了承するとレイギエナが大袈裟に咳をして声を整え、俺の瞳を真っ直ぐ見据える。

「貴方の事を教えてください」

「……はい？」

そんな事をお見合いでも聞かないようなセルフに思わず思考が停止する。

そんな事を聞いてレイギエナの得になるのか、どんな目的があるの

か、その意図が理解できない。

「何を教えるの？」

「言葉通りです。貴方の趣味趣向、出生、家族構成、友人、そしてトラウマ」

心臓が跳ねる。トラウマ、という言葉聞いて、先程の記憶が想起される。

「先程、貴方が躡られていた時、貴方は頻りに先生、と言いながら左腕を抑えていました」

「……ここからは私の勘になりますが、貴方は『先生』と呼ぶ人とその左腕の傷は、何らかの関連性があつて、その出来事が原因でこの島に来たのでは？」

「そして、貴方はそのトラウマをずっと己の内に抱え込んでいる」

「自分を追い込む程に、悪夢として見てしまう程に」

「違いますか？」

唐突な、それでいて確信を突く言葉。

ずきりと左腕が疼く。先程堰き止められた感情が、再び渦を巻き始める。

炎へと向かう先生が、向かう先生を薙ぎ払う黒龍の姿が、目の前の出来事であるかのように脳裏に浮かぶ。

息が早まる。愛する人を殺された怒りで、愛する人を失った恐怖で、自然と拳が握られる。

「ハンターさん」

荒ぶりそうな激情は、またしてもレイギエナの声で制された。

「その経験が、貴方にどのような苦しみを刻み込んだのか、私は知りません」

我儘を言う子供に諭す母親の様に、ゆっくりと言葉をかけられる。

「けど、本当に苦しいのはそれを一人で抱え込む事だと思っんです」握った拳に、冷たい手が重ねられる。

その冷たさとは裏腹に、何処か心が安心する。

「だから、一度此処で吐き出しましょうよ。ね？」

その言葉で、俺の心の何処かで堰き止められていた感情が溢れた。

俺の過去、愛した人の事、その人が死んだ事、愛する人を殺した黒龍をこの手で殺した事、その際に傷を受けて今までのようにハンターとしての活動が出来なくなった事。

まるで氾濫を起こした川のように、止まることなく、その全てを目の前の少女にぶつけた。目の前の少女は、そんな俺の言葉をただ静かに聞いてくれた。当たり前前の様に手を握り、寄り添うようにしてくれた。

そして、俺が一通り感情を吐いた後、レイギエナはただ一言

「頑張りましたね、ハンターさん」

そう言っつて、俺の頭を自身の胸に寄せ、優しく抱き留めた。そこでまた、俺の堤防は決壊した。先生が死んだ時に出し尽くしたと思っていた涙がぼろぼろと零れ落ちる。

俺はレイギエナの胸の中で泣いて、泣いて、気づいた頃には意識が薄れくる。

まだ病魔が体を蝕んでいるからか、それとも昔の事を吐き出してスッキリした安心で眠気がきたのか、どちらとも言えないが、言いきれる事が一つ。

この日はもう、あの日の夢を見なかった。

気づいたらハンターさんは眠っていた。

私の胸の中ですやすやと寝息をたてるハンターさん。…….名残惜しいですが、こんな体勢で睡眠をとると体を痛めてしまいます。

愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる
♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

しばらくお待ちください

ふう．．．．失礼しました。私はどうにもハンターさんが関わると感情が昂るようで、まあ仕方ないですね。寧ろ、ハンターさんの眠りを妨げない為にキッチンに来るまで抑えたのを褒めて欲しいぐらいです。

それにしても．．．．ハンターさんの想い人を殺した黒龍ですか．．．．どうにもきな臭いですね。気は進みませんが、彼女に調べてもらう様に頼んでみましょうか。

旅好きで噂好きの彼女なら、当時の情報を何か知っているかも知れませんがね。

．．．．当時のことを知ることが出来れば、ハンターさんのトラウマを取り除けるかも知れません。そうしてあわよくば．．．．ふふふつ。

——待っていてくださいハンターさん。貴方の全てを、愛してあげますからね♡